

ヘンリー・キッシンジャー著「外交(下)」日本経済新聞社 1996年6月17日刊を読む

1. アメリカが歴史的に持っているバランス・オブ・パワーに対する反感にもかかわらず、これらの教訓は、冷戦後のアメリカの外交政策にとって意義あるものである。現在、その歴史において初めて、アメリカは自分がその中で最も強大な国であるような国際システムの一部になっている。その巨大な軍事力にもかかわらず、アメリカはもはやその意思を押しつけることはない。なぜなら、アメリカの力もイデオロギーも、帝国主義的な野望には向けられないからである。そしてアメリカが最も優越している核兵器は、それ以外の実際に使える力を均等化している。
2. アメリカはそれゆえ、19世紀のヨーロッパと多くの類似点を持つ世界——しかも世界的広がりを持つ世界——の中に自分がいることに気づきつつある。それゆえ、メッテルニッヒのシステムと同類のものが進展するのを期待することが出来よう。彼のシステムでは、バランス・オブ・パワーが、価値観を共有することによって強化されている。そして現代においては、この価値というものは民主主義であるべきである。
3. メッテルニッヒは正統的な秩序というものを創造する必要はなかったが、それは、本質的にはすでに存在していたのである。現代の世界においては、民主主義はそれほど普遍的ではなく、それが宣言された場所によって、かならずしも同じような言葉で定義されていない。アメリカがある道徳的なコンセンサスをもって、均衡を強化しようとするのは、当然のことである。自らの信念に忠実であるためには、民主主義に対する世界的なコミットメントへ向けて、アメリカは、出来る限り広範にわたる道徳的なコンセンサスをつくり出さねばならない。しかし、同時に、バランス・オブ・パワーの分析をあえて否定することはしない。なぜなら、道徳的なコンセンサスの追求は、それが均衡を壊した時に自己破壊的なものとなるからである。
4. もし、正統性に基づいたウィルソン主義的なシステムが不可能ならば、アメリカは、たとえ自分には合わないやり方と思っても、バランス・オブ・パワーの中で動くことを学ばねばならないだろう。19世紀には、バランス・オブ・パワーのシステムには、2つの型があった。1つは、パーマーソンとディズレイリのアプローチを例とするイギリス型であり、もう1つはビスマルク型である。イギリス型アプローチは、自分が参加する前に、バランス・オブ・パワーが直接脅かされるのを待ち、ほとんどの場合、弱い方の側に参加する、というものである。ビスマルクのアプローチは、出来る限り多くの当事国と緊密な関係を確立し、重複するいくつもの同盟関係を打ち立て、そして、その結果として持った影響力を同盟国相互の要求を調整するために使用することによって、さまざまな難問が出てくるのを未然に防ごうとするものである。

- 5 . 2 つの世界大戦を通してアメリカがドイツとの対応から経験したことからすると、不思議なことではあるが、ビスマルクのバランス・オブ・パワーを操作するやりの方が、国際関係に対するアメリカの伝統的なアプローチにおそらく適している。パーマーストン・ディズレイリ方式を実施するには、紛争から厳しく超然としていることと同時に、均衡が脅威にさらされた場合、容赦なく介入することが要求される。紛争も脅威も両方とも、バランス・オブ・パワーの観点からのみ、評価されるべきである。アメリカにとっては、厳密に力の観点からのみ国際的な事件を解釈することについては言うまでもなく、超然としていることや容赦なく振る舞うことを使い分けることもきわめて難しいことであろう。
- 6 . ビスマルクの晩年の政策は、さまざまなグループの国と、共通の目的に対するコンセンサスを持つことによって、あらかじめ力の行使を抑止しようとするものだった。相互依存の世界においては、アメリカは、イギリスの“ 光栄ある孤立 ” を実践することは難しいことに気づくだろう。しかしまた、世界のあらゆる場所に適合するような安全保障の包括的なシステムを打ち立てることも出来そうにない。最も創造的な解決策は、重なり合う部分のある組織を構築することである。そのあるものは、南北アメリカにおけるような、共通の政治的・経済的原則に基づくものであり、またあるものは、大西洋地域や北東アジアにおけるような共通の原則と安全保障上の関心が結びついたものであり、その他に東南アジアとの関係におけるように経済的な結びつきに大きく依存したものも存在する。
- 7 . いずれにしても、歴史は、責務が大きいからと言って失敗を許しはしないだろう。アメリカは、あらゆる選択が可能であった時代から、自国の限界さえ知ればまだ他のどの社会よりも多くのことを達成出来る時代への移行をやり遂げねばならない。アメリカはその歴史の大部分を通じて、生存に関わるような脅威を外国から受けたことがなかった。冷戦期にはそのような脅威がとうとう出現したが、それは完全に克服された。このようにして、アメリカは経験によって、世界でアメリカだけが他国から影響されず、その美德と偉業によって他に優越出来るのだという信念をさらに強めてきた。
- 8 . 冷戦後の世界では、そのような態度は、それまでのナイーブさを自己満足に導くおそれがある。アメリカが世界を支配することも世界から身をひくことも出来ず、きわめて強力でありながらも非常に傷つきやすい存在である今の時代において、もとよりその偉大さのゆえんたる理想を放棄してはならない。しかしまた、自らの力の限界を錯覚して、その偉大さを危険にさらすべきでもない。世界のリーダーシップをとることはアメリカの力量および価値観からして必然的ではあるものの、アメリカが他国のことにかかわれば、それで他国のために親切をしているのだと思い込んだり、その親切をやめるという脅しにより、その意思を押しつける無限の力があると思い込むべきではない。アメリカがリアルポリティークとかかわる場合には、歴史上初めて、自由の名の下につくられたことが明らかである社会としての中心的価値観を、当然考慮に入れなければならない。しかし同時にアメリカの生存と進歩は、現実を反映した選択をする能力にもかかっている。さもなければ、外交

政策はひとりよがりのポーズになってしまう。これらの要素にかけられる相対的比重と、そこにいかなる犠牲を払うかは、政治指導者の試練となり、その資質を測るものとなろう。指導者が決してしてはならないことは、選択には対価を伴わないということと、もう 1 つはバランスを図る必要がないということを示唆することである。

9 . 近代世界において、3 度目の世界秩序への構築への道を進むに際して、アメリカの理想主義は今まで同様、いやおそらくそれ以上に欠くことの出来ないものとなるであろう。しかし、その理想主義の役割は、新しい世界秩序の中における不完全な世界において、さまざまなあいまいな選択肢の中をアメリカが生き抜いていく自信を与えることにある。アメリカの国益を実際的に定義するには、伝統的なアメリカ理想主義は現実への慎重な評価と結びついていなければならない。これまではアメリカの外交政策の努力は、究極的には、世界に本来内在している調和が明白に姿を現すという、ユートピア的ビジョンによって鼓舞されてきた。

10 . しかし、そのような究極的な成果はほとんど見えていない。アメリカの理想の実現は、1 つ 1 つの部分的な成功の、辛抱強い積み重ねによってこそ求められるべきだろう。冷戦時代に特徴的だった現実の脅威や、敵対するイデオロギーの時代は去った。今後の世界秩序への対処に必要な信念はもっと抽象的なものだ。将来へのビジョンははっきりとは示すことの出来ないものであり、希望と可能性の間関係についての判断は、本質的に推量に基づくものである。ウィルソン主義——人類の平和、安定、進歩、自由——というアメリカの過去の目標は、終わりのない旅の中で求めていかねばならない。スペインの諺は言う、「旅人よ、道はない。道は歩くことによって出来てくるのだ」と。

P536 ~ 539

[コメント]

キッシンジャー博士が示したアメリカ外交の基本的スタンス(立ち位置)は戦後一貫して変わることはない。このことを前提に、日米同盟は成立しているといってよい。自らが選択したはずの政権の揺らぎが厳しい日本国民は、どのような意思を次の政治の担い手に表明したらよいのか。大いに考えたい。

- 2010 年 4 月 26 日 林明夫記 -